

このように、今から118年前の1895年にフランスのリュミエールが完成したシネマトグラフ（動く写真）はフィルムが命だったが、技術革新の結果、今や写真機と同じようにフィルムは完全にデジタルに取って代わられてしまった。

『ニュー・シネマ・パラダイス』の後も『海の上のピアニスト』（99年）、『マレーナ』（00年）等々の名作を発表し続けてきたトルナトーレ監督はずっとフィルムにこだわり、デジタルで撮る時機について悩んでいたが、ある時突然「待つ意味があるのか？」と自問自答し、ついにデジタルへの一步を踏み出したのが本作らしい。フィルムからデジタルへ！それは、燃料が石炭から石油に移行したのと同じように、もはや動かしたい流れとして定着しているが、さすがにフィルムの巨匠トルナトーレ監督初のデジタル撮影による本作の映像の美しさを、数々の圧倒されそうな美術品と共にタップリと楽しみたい。

■英題は『The Best Offer』、その意味は？■

本作はイタリア映画だが、使われている言語は英語で、英題は『The Best Offer』。これを文字どおり訳せば「最良の注文」ということ。それだけでは何のことかさっぱりわからないが、何となく意味深・・・？それに対して、邦題の『鑑定士と顔のない依頼人』は、本作の主人公である凄腕オークション鑑定士ヴァーゼル（ジェフリー・ラッシュ）と、彼に鑑定を依頼する謎の女性クレア（シルヴィア・ホークス）（の肩書き？）を並べただけにすぎないから、いかにも表面的で面白味がない。

それはともかく、広大なお屋敷に使用人のフレッド（フィリップ・ジャクソン）だけをおいて住んでいるクレアは、なぜヴァーゼルに1年前に亡くなった両親が残した家具や絵画の査定を依頼（オファー）したの？また、せっかく依頼しておきながら、広大なお屋敷の隠し部屋に閉じこもったまま、なぜヴァーゼルの前に姿を現さないの？クレアが「顔のない依頼人」になったのは、フレッドの説明によると「広場恐怖症」という奇妙な病気にかかっているためらしいが、そもそも「広場恐怖症」とは一体ナニ？さらに、広大なお屋敷の地下には、数々の「お宝」を鑑定してきたヴァーゼルでさえ、あっと驚く貴重な品々が無造作に置かれていたが、それは一体なぜ？

2回もすっぱかさされた挙げ句、やっとな実現した扉越しでのクレアとの会話によれば、クレアは15歳の時から一切外に出ていないらしい。食べ物をおいしく食べるには空腹が「ベストソース」であるのと同じように、男性が女性に魅力を感じるについては、見える美しさ以上に見えない美しさがあるはずだ。扉越しに聞こえてくる若い女性の声は魅力的だから、ヴァーゼルならずとも、男なら誰でも一度その顔を見たいと願うのは当然。トルナトーレ監督は、そんな男ゴコロを見透かしたように、クレアの姿をスクリーン上に登場させず、ヴァーゼルとの会話のみのシーンを続けることによって、クレアの顔を一度見たいという男の願望をトコトン引っ張っていくから、観客のあなたもきっとヴァーゼルと共に焦らされるはずだ。しかしてその結果、あなたもヴァーゼルと同じように、ひょっとして紳士としてあるまじき行為に及ぶことがあるかも・・・？



© 2012 Paoo Cinematografica srl.

■□■この鑑定士は、なぜこんなにリッチなの？■□■

鑑定士といえば、弁護士の私はどうしても不動産鑑定士のことを思い浮かべるが、本作の主人公ヴァーシルの仕事は絵画や宝石、家具等の美術品の鑑定。つまり、TVで人気の『開運！なんでも鑑定団』に登場してくる中島誠之助のように「お宝」の真贋を見抜き、その価値を金銭に換算するのが仕事だ。ヴァーシルの場合はさらに鑑定士の他に信頼できる「オークショニア」として、世界各国の美術品愛好家からオファーがかかっているようだから、結構稼いでいるらしい。もっとも、彼はこの道一筋で何十年も生きてきたから、人間は苦手。したがって、友人は修理店を営む恐ろしく手先の器用な男ロバート（ジム・スタージェス）以外は誰もいないうえ、女性との付き合いは一切なく、今でも独身だ。当然その性格は偏屈で、服装の趣味、食事の流儀は自己流だし、ケータイ電話は一切拒否。住居も高級ホテルのようで、室内は整然と片付けられ塵一つない状態だ。

そんなヴァーシルの最上の楽しみは、自宅の隠し部屋に入り、一人で壁一面に飾った女性の肖像画を愛でること。そこには、ルノワールの「ジャンヌ・サマリーの肖像」、モディリアーニの「青い目の女」、ゴヤの「ベルムーデス夫人の肖像」等々、世界の大画家の名画（当然ホンモノ！）がピッシリと飾られていたから、ビックリ。一体これはおカネに換算すれば、HOW MUCH？一介の鑑定士にすぎないヴァーシルがこれだけ貴重な絵画を大量に収集できているのは、自分が仕切るオークションで長年のパートナーであるビリー

(ドナルド・サザーランド) とつるんで悪さを働いてきた結果らしいが、さてそのテクニクとは？ちなみに現在、阪急阪神ホテルズがメニューと異なる食材を使っていたことがバレて、誤表示か？それとも偽装か？と大問題になっているが、長年続けてきた彼の「インチキ」はこれからずっと通用するの・・・？本作を鑑賞するについては、美術品の真贋も大切だが、人間そのものの真贋の判定の方がもっと大切なことを忘れずに！

■□■登場人物それぞれのキャラと、その真贋に注目！■□■

本作の主人公ヴァージルを演じるジェフリー・ラッシュは『英国王のスピーチ』（10年）（『シネマルーム26』10頁参照）でアカデミー賞助演男優賞にノミネートされた名優だが、私が強く印象に残っているのは、書くことへの執念を燃やすサド伯爵ことマルキド・サドを演じた『クイルス』（00年）での熱演（『シネマルーム1』74頁参照）。そんな1951年生まれの名優が、本作前半では一流のオークションアとして絶大な権力を奮う姿を堂々と演じている。もともと、クレアの美しい顔を一見して人生ではじめての恋に落ち、ロバートのアドバイス（？）を受けながら恋の道に猛進していく姿は少し滑稽だから、豊富な恋愛経験をもち、女性の取り扱いについて自信をもっているあなたなら、少し苦笑しながらヴァージルのそんな恋愛模様を楽しみたい。

本作にはヴァージルとクレアを中心として、その周りにさまざまなキャラの人物が登場する。その主要なキャラは、ヴァージルが長年信頼してきたオークションの相棒ビリーと、ヴァージルがただ一人だけ親友だと認める美術修復の天才ロバートの2人だ。しかし、中盤以降はクレアの使用人のフレッドやロバートの恋人のサラ（リア・ケベデ）、さらにクレアの屋敷の向かいにあるカフェの店主や、そこで呪文のように数字をくり返している奇妙な女性が次々と登場し、何やら思わせぶりの動きを示していくのでそれに注目！美術品の真贋を見分けるについて天才的な才能を発揮するヴァージルは、「すべての偽りに本物が潜む」が持論。そして「贋作者は必ず痕跡を残す」というスタンスで美術品の真贋を識別していたが、クレアと知り合った後のヴァージルの行動を見ていると、まるで初恋の魔力に翻弄される少年のようだ。こんな状態であっても美術品の真贋は見抜くことができるだろうが、さて人間の真贋は？

クレアは親子ほど年の離れたヴァージルの求愛に好意的だが、いくらカネは持ってもホントにこんな偏屈なおじさんでいいの？また、ビリーやロバートも何かとヴァージルに対して親切そうだが、これはホントに長年の友情のたまものなの？それとも・・・？本作では美術品の真贋と共に、登場人物それぞれのキャラとその真贋に注目！

■□■この年にして、こんないい女を！何と幸せな・・・■□■

ヴァージルを演ずるジェフリー・ラッシュは1951年生まれだから、ほぼ私と同じ年。役柄上の年齢は明らかにされていないが、概ね60歳前後のおじさん（老人？）だ。したがって、その年にしてはじめて恋に落ち、クレアのような若くピチピチした、しかも上品な美人を手に入れることができれば大満足！クレアの方も15歳の時から屋敷の中に閉じこもり、誰とも接したことがないとは思えないほどヴァージルを信頼し、ピッタリ寄り添

ってきたから、ジュゼッペ・トルナトーレ監督が描く凄腕オークション鑑定士の物語はハッピーエンドに・・・？

誰もが一見そう思ってしまいそうだが、本作には随所に何か引っかかるところがある。その象徴は、クレアの屋敷の向かいのカフェに住んでいる奇妙な女。また、バレリーナの姿をしたクレアの母親の肖像画とされている一枚の「少女の肖像画」だ。誰だって、母親がこんなに美しいのならその娘も……。そう考えるのは当然だが、ひょっとして、そこには何らかの企みが……。さらに、ヴァージルがクレアのお屋敷から少しずつ持ち出した部品を使って、親友のロバートが少しずつ完成品を組み上げていく姿も何か曰く因縁がありそう。さらに、年は若くとも、恋愛にかけてはベテランらしいロバートが、こんなに自由にヴァージルの恋心を操っている姿を見ると、これはホントに善意だけ？と疑いたくなってくる。とにかく、本作は美術品の真贋と同じように、登場人物の真贋を見抜くことが不可欠だが、ヴァージルはこんなに順調にクレアのようないい女をゲットしているの？

■ラスト10分間は、あっと驚く展開に！■

トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』はホントに心温まる名作だったが、あれは監督33歳の時の作品だから、多分その当時は性格も純真だったのだろう。ところが、本作のラスト10分間を観ると、1956年生まれの同監督も60歳近くになって人間観察眼が複雑になり、人間を斜めに見たり裏から見たりするのが楽しくなってきたのかな、と思わざるをえない。インドのM・ナイト・シャラン監督の『シックスセンス』(99年)は「絶対にネタばらしをしないで下さい」が大きな「売り」だったが、本作ではヴァージルと同じように「この一瞬」にあなたの顔も凍りつくはずだ。

それは、天才オークション鑑定士として、功成り名を遂げ、引退式のような盛大なオークションも無事に終え、これからはクレアと2人で楽しく余生を過ごすだけという状況下で、例の「少女の肖像画」を自宅の隠し部屋に飾るべく、部屋の中に足を踏み入れた時だ。そこで何を目にしたのか、ヴァージルの身体は一瞬凍りつき、「少女の肖像画」を床の上に落としてしまったが、これは一体なぜ？さあ、これ以上のネタばらしは本作では厳禁だ。

本作におけるラスト10分間は、あなたの映画鑑賞眼がどれほどのものかが試されるものになるはずだ。したがって、もしあなたがそれまでの2時間をとことろ居眠りしながら観ていたとすれば、再度最初から鑑賞しなくちゃ！本作のラスト10分間のあっと驚く展開に、あなたは驚愕することまちがいない！

2013(平成25)年11月1日記